

心やさしい友

佐々木 斐夫



心やさしい友

佐々木 斐夫

みすず書房

佐々木斐夫
心やさしい友

1977年11月12日 印刷

1977年11月22日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京 0-195132

本文印刷所 三陽社

扉・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1977 Misuzu Shobo

Printed in Japan

書籍コード 0093-11711-8005

落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

I	幼年時代	3
II	少年時代	61
III	青年時代 山手の丘で	135
IV	青年時代 池のほとりで	199
V	苦しみの季節に	313
VI	そして愛の日を	433

大正の初めのある年のことである。樹立や林の多い山手の丘は、緑地の高蒔絵の櫃のような姿を春の煦光のなかに横たえ、その上には外国人たちの住居である色とりどりの洋館が、樹々の繁みのあいだへ螺鈿のように美しく鑲められていた。どの家も、屋根と壁は明るい陽光を受けて鈍く輝き、その光のなかで樹々の嫩枝は葉芽に満たされ、庭の芝生は鮮緑に染み、手作りの花壇や花畑は初花の榮えで賑わっていた。

それはちょうど復活祭の週間の終わったばかりのある麗らかな日であった。丘の家の一軒はこの季節にふさわしい飲びの訪いを受けていた。年に差のある夫婦だけの家庭に、ひとりの男の児が生まれたのである。庭の縁では例年より早く桜の花が咲き盛り、今はもう微風の渦に包まれるたびに少しづつ花びらを散らし始めていた。さして大きくない二階建ての家で、黄いろい板壁は午後の陽射しを受けて金いろに輝き、緑いろの鎧戸を眼瞼にもつ窓は、汚れない眼のように光へ向かつて開け放たれていた。

若い母は赤児といっしょに二階の寢室で横になったいた。東南の隅に位置する部屋の窓には、あまり年を経っていない白櫨の頂きが迫り、若芽のついた小枝の群が時折りささめき交わしていた。翼をゆるやかに煽る南の風が切れぎれに飛んでいるからだ。重い総を垂らした窓掛がかすかに揺れ、薔薇の花模様

の壁紙が、少し破れているところで、はたはたと鳴っていた。しかし辺りは春の真昼の長閑な静寂にまなく浸されていた。……

数日まえ病院の一室で初めての異常な苦しみを経験した後、いま帰宅して来たばかりの母親の身体は、ふくよかな床のなかに休められていても、まだ疲労から脱け切ってはいなかった。それでも少し蒼ざめた顔の上には平安が漲っていて、目の縁に宿る一粒の涙は温かだった。彼女は傍らに寝ている赤児にときどき和やかな視線を走らせた。それはこれまで幾度か他人の子供に溅いだまなざしと同じ光を帯びていたが、前には知らなかった性質の歎びにより、いつそうしみらな映えを差し添えられていた。そして自分の血の流れている新しい生命の存在を認め直すごとに、彼女は言いようのない幸福感に誘われて、繰り返し安堵の吐息を洩らすのであった。

そこへひとりの中年の男が入って来た。フェルトの上靴をはき、青い部屋着をまとっている。長身で額と鼻が高く、眉や髭は濃いけれども、顔は柔和な輪郭に縁どられていた。それは赤児の父親であった。母親はまだうら若く、茶いろの眸と黒い髪をもっているのに対して、彼の眸は碧くて深い眼窩の底に潜み、亜麻いろの髪はわずかながらもう銀髪を混えていた。……慰藉と愛情の籠った微笑で妻に会釈すると、彼は黙って寝台のそばに近づいた。若い母はかすかに頷いて、こちらは幸福と感謝を示す笑いを顔いっぱい浮かべ、傍らに眠っている子供を更めて見やるのだった。父親も促されたかのように、その小さな寝顔へ目を移した。熱い愛情の輝きは父の顔にもひとしお冴え渡った。しかし光に添う影のように、ある種の悩ましげな表情が笑う唇のまわりにうつすらと浮かんでいた。母としての歎びに酔い痴れている若い妻には、いま思いつきもしない懸念が、つまりまったく別の二つの人種から血を受けた者の将来に対する不安が、定かならぬままに彼の心に重くのしかかっていたからである。……

父は上靴のまま真昼の庭に出た。やっと青ばみ始めた芝草を踏んでゆくと、泡雪のような桜の花びらはらはらと足もとに散りかかった。彼は目を上げて、祭の舟のように華麗な花樹を眺めた。青空を背景にした薄紅いの輝きが目に染み透るかのようだった。……この温厚なウィーン人の心から翳りは消え、中年になって初めて子供を儲けた喜びだけがそこに残った。

故郷の都市で最初の縁を結んだ妻とは、イタリア系の情の烈しい彼女の犯した過ちが原因で別れていた。彼は遠くに隠れ場を求め、光学器具材料を扱うドイツ系の会社に職を奉じたのも、極東のこの支店に勤務することを条件にしてであった。異国での十年に近い孤独な暮しの間に祖先からの宗教への回心が胸に生じ、彼は教会に足繁く通うようになり、平常の儀式にも怠らず出席した。幼いころの醇朴な帰依の感情が昔のままに蘇り、信仰に頼るだけでこの淋しい生活にも堪えおおせると思った。しかし一つ前の冬、風邪をこじらせて三週間あまりを病院で床についていなければならなかったとき、付添いの若い看護婦の配慮に充ちた優しさが、心に染みて忘れ兼ねた。さまざまな曲折を経て妻に迎えることができたのは、今と同じ桜の花の咲く時節であった。そしてそれからまる一年、平和に過ごされた幸福な家庭のなかへ、今こうして、ひとりの愛くるしい子供を迎え入れることになったのである。

数日前の朝方であった。爽やかな空気を震わせながら、教会の鐘が鳴り渡っているうちに、子供はこの世のなかに現われた。彼が聖堂で、ミサの開始を待っていた時のことである。聖式の進むあいだにも、生まれようとしている子供のことが、時折り脳裡に浮かんで来た。それが帰り道、病院に立ち寄ってみると、子供はもう母の傍らに寝ていたのである。泣いていた赤児は、ミサの終了を告げる鐘が鳴ると、その音を耳にしたからのようにおとなしくなった。そんな風に聞かされて、父は喜んだ。聖なる鐘の音

の影響を彼は疑わなかったのである。神への教えは父の信仰する道に従わせ、同時に法律の上での縁籍は母の国へ帰属させて育ててゆくことは、彼のかねてからの念願であった。そしてウィーンよりは横浜の方に子供の成育のために良い環境があると思っていた。呼び名も洗礼名のほかに、日本の名を付けなくてはならない、……最後にはそんなことまで考えながら、彼は家のなかへ、妻と子供の側へ戻っていった。

人気のない庭で昼は傾いた。柳の枝垂れが二、三度風にあおられ、また揺れ落ちた。しかしそのあと澱んだように動かなくなつた暖かな空気は、地壇の花々の芳香で飽和された。……やがて夕影が土を浸し、ゆるやかに樹々の幹を匍い登っていった。桜の樹々の翳りはことに目立った。みずみずしい細枝がたそがれるにつれ、その上に咲く花々は蒼ざめた。薔薇いろの微光が、四月の自然のあらゆる物象を縁どり、ただ幾つかの円い雲だけが中天で明るく映えていたが、その核心はやはり重いろに濁つて来た。……裏手の谷の林からうぐいすの声が涼しく響き、その声に夢見ごちに膨らまされた静寂は、おもむろにものみなの上へひろがっていった。ついに東の空には緑いろの星々がまたたきはじめ、家々の窓には灯びが点りだした。その一つの窓のなかでは、眠り続ける子供の上に、生涯の初の日々の一日が、涼しく穏やかに暮れていった。

*

母の手でゆすられる簾の揺籃。薄光る練り絹の布団にくるまれて休らう幼児。泉の吹きのように低くささやく母の子守唄と、快い身のゆらぎにさそわれて、幼児はうとうととまどろむ。……すっかり寝入

ったのを見届けてから、母は立ち上って、そつと離れてゆく。幼児は気がつかない。寢息は健やかで、しばらくは安心しきったような表情が寝顔の上に浮かんでいる。

そのうち唇がふと痙攣する。頬笑みへ砕けそうになる。けれども仄かな愁いが口の端に固くまつわりついていて、なかなか崩れない。遠い幻のなかに浮かぶ母の姿が、夢のなかへ入って来たのだ。その母は、滑らかな生地きじの背布せふが唐草模様の椅子に腰掛けて、何か深い想いにとらわれている。幼児は、彼女がちらちらとひらめく赤い飾紙のことを考えているのだ、と思う。するとなぜかむやみに母が懐しくなる。手を差し伸ばして、「ママ、ママ」と呼ぶ。……少しも聞えないらしい。母の顔つきは哀しげになり、……それから双の目のまなじりを指で押えて、外側に引きながら臉を合わせてしまう。母は何も見ようとしなない。幼児も外の世界へ流れ出てしまった。その眸は暗くふさがれている。そして母はいま放心しきっている。……「ママ、ママ」と幼児は叫びながら、しくしく泣き出す。母の胸、彼の大地、彼の根源が沈んでしまったのだ。冷たい恐怖が幼い心の上にのしかかり、その心を凍えさせようとする。

……

けれども幼児の内部ではもう生命の焰が燃えている。それはこの恐怖に遭遇すると熱風を巻き起こし、その恐怖の氷霧を溶かして失われたものを取り戻そうとする。少しも余裕のない悲壮な戦いである。

このようにして、根源なものに対する生の哀慕と追求とは、必ず忘れ果ててしまうその生の初の日々に、もう芽ぐんでいるのだ。

*

幼児は眠っている。クリスマスの前夜で、もう夜半に近い。温められた小さな部屋。目が覚めても外

に出られないように、寝台は木の枠の金網で囲んである。三つ折の毛布の下に、幼児は俯伏の姿勢のままで寝入っている。規則正しい柔らかな寝息。金茶いろの産毛のいっぴい生えた頸と両の手とが、毛布の外へはみ出ている。首は右に曲げられ、顔の半ばは羽根枕のなかに埋まり、押し潰された小さな鼻翼が時折りかすかに顫える。

とにかく寝かせつけなくては用が捗らない。枕で顔を隠して泣きじゃくる幼児を、若い女中は不憫がりながらも相手にせず、車のついた寝台をただいつまでもかたかたと揺っていた。母は知人の家の晩餐に招かれて、宵のうちから留守にしていた。……やがて諦めてか疲れてか、熱い涙で枕の被いを濡らしたまま幼児が眠りに入ると、音立てないように気を配りながら、女中はそっと階下へ降りていった。二時間ほど前のことである。

今は滲みわたる静かさ。外には雪が降っている。穏やかで風はない。窓ガラスは内側で湿り、その上にたくさんの灯火がにじみながら映っている。それは、向いの丘の教会の大窓から洩れるクリスマス・イヴの賑やかな照明である。……静かさのなかで幼児は目を覚ます。不自然な姿勢が恐い夢を眠りのうちに産みつけた。数日前、どうしたことか食卓から卵が転げ落ち、足の上で割れたことがあった。産みつけられた夢は、その卵のように、ころげて壊れて、胸の上に汁を流した。気味悪くて、息苦しい。幼児は仰向けに寝返りうつと、低い声で泣き出す。階下の部屋までは聞えない。幼児はおぼつканく泣き続ける、半ば眠ったままで……。

夜半になった。教会の鐘の音が鳴り渡った。そのひびきには、人類に愛の福音をもたらした人の誕生を祝う誠意が、クリスマスの歓びが籠っていた。潤みやかな雪の落下と入り交り、鐘の音は夜を限りなく軟らかな調べのなかへ溶かし込み、なごやかな余韻のさざめきで幼児の耳を満たした。母の不在の歎

きをしだいに薄めてゆく甘美な和音がそこから咲き出して、彼の魂をその暖かな花心に包み入れてくれた。恐い夢は消え、胸はなごみ、幼児は健やかな眠りへ帰った。楽な姿勢に戻った小さな鼻と口から、ふたたびすやすやとやさしい寝息が洩れはじめた。

戸外の雪は降りやまず、聖なる日の朝の世界を清らかに純白に飾りたてようとしていた。

*

鐘のひびきに和らげられる幼児の魂は、またすべての音の印象をもつとも敏感に受け入れる魂であった。世界に満ち溢ちている無限のエネルギーは、ほのぼのと明けそめる幼児の意識へ、まず音の連なりになって働きかけた。目に見えるものも、その動きや流れが心に親しみを早めさせた。しかしその流動に律動や和声を見つけ出したり、視覚の映像を聴覚の世界に翻転して音の形象を創り出したりする能力は、精神がもっと成熟した後でこそ開けてくるものである。自然の静寂や物の沈黙のなかからも、生命の調べはたえず湧きいずんでいて、幼児の柔らかな感覚に刺激を与えていた。三つ四つの頃から、もうその刺激に応じつつ、彼は自分の内部に起きがちなある情緒の漾蕩に揺られていた。まだほんの偶然な、ほんやりした知覚の波浪に、浮き漂わされているに過ぎなかったのだけれども……。

母の子守唄と共に一つの置時計の歌が彼の意識へ入ってくる。いつ始まったか判らないままに古い想い出である。生まれる前にも聴いたことがあるように思われる。それはウィーンのある時計職人が、業務の余暇に、手をこらして作った銘品であった。それを偶然の機会に手に入れた父は、またひょっとした気まぐれからこの国まで携えて来た。しかしそれは必然のように、彼の子供の運命へ喰い入った。

歩き始めて間もない頃から、幼児はこの時計を愛していた。鐘の音と同質の明るさのなかに、霑んで

軟らかな響きを交え、時計は古い民謡の旋律を十五分ごとに奏でた。春の甦りを讃える北方の民族の原野と森の歌であった。その調べには父方の祖先の淳樸な感情が籠っていて、それとは気づかぬままに耳傾ける幼児の血を温くささめかした。目を閉じて母の膝に快いひとときのまどろみを食るとき、それは誘眠のためのオルゴールの役目をつとめ、飼犬のタクを相手にして庭で遊んでいるとき、窓から洩れ出るその音は、しばしば彼の想いをうっとりさせるのであった。

子供はすべて新奇なものを好み、慣れるに従い何でも容赦なく打ち捨ててゆく。けれどもこの音楽時計の歌だけは別で、母の口吟さむ子守唄と共に、彼の胸に永遠に生き続けてゆく。後に機械が壊れ、修繕に出しても直らず、やがて関東地方を襲った大震災に会い、時計は焼け失せてしまったが、彼は生あるものに對するのと同じ愛情をもって、いつまでもその想い出を懐しんだ。

*

夏の夜である。窓は明け放たれ、時折り流れ入るそよ風が、白い薄紗のカーテンをゆるやかにひるがえす。その蔭で幼児はまどろんでいる。……風は幼児の穏やかな寝顔と浅い眠りを涼しく洗い、向いの壁に当たって碎けると、無数の透明な蝶に化して乱れ飛び、一つの音から湧きいずむ上音の群れのようになり、諧和してひろがるあまたの翅音をあたりへ撒き散らす。……風の止むあいまには、同じような響きをふりまく大気のざわめきが、遠い上空から降りそそぐ。……幼児の敏感な耳は、風のひびきも、空から伝わるせせらぎも聴きつけているのだ。眠っているのに、聴覚は反って澄まされ、鋭くされている。それゆえ幼児の傾聴はいっそう純粹で、覚めているときより深く、彼の魂は、聴くことのかまえの尖端まで身を伸ばし切り、そこで受容の花を咲かせようとしている。

雨の少ない地方で野外生活をしていた古代の民族は、透明で清澄な大氣と自然を満たす眞の静寂とのなかで、夜の大空を見上げるとき、眺めることを通して彼らの心耳に、天体の運行に伴って生じる調音の流れ、宇宙の音楽をはっきりと聴きとった。アリストテレスの言うように、その音楽は、人が生まれる前から耳に続いているので、無音との対比のため、ふだんはその存在を知覚することができない。……科学の発展に伴い、厚い自意識の底に埋没してしまったそのような本来の聴覚を、古代人に似ている子供や素朴な芸術家や思想家は、まだ時に応じて働かすことができる。深い夜の奥で、彼らの魂は、ことばに表わし尽くせぬまま、ふしぎなその諧調を体感する。天体の運動の節奏へ、宇宙の本源の律動的な脈搏へ、彼らは自分たちの心臓の純一な鼓動をじかに合わせるができるのだ。

窓の外には黒々と立ち並ぶ樹立があり、その上には明るい星空がひろがっている。星々は動いている。幼児の魂はほのかにその運行の律動を感じている。自分がその運行の法則のなかにおり、その支配をいま直接に受けていること、そしていつかその眞実の自己理解へ到達する運命にあることを予感している。……いまふしぎな薄明に包まれて、彼の魂は星々のあいだへ浮き漂ってゆく。星々の動きを整える節奏が彼の魂の呼吸を導き、星々が産み出す調べのハルモニアのなかで彼の魂も協和する音をたえまなく産んでゆく。なぜなら彼の魂も流れているのだから。しかしとどめがたい成長と変化。やがて彼の魂が明白な日常の意識へ目覚めたら、その時幼児は地上に墮ちるのだ。彼は空を見上げるだろう。そして自分の魂が星々の一つであったことをおぼろげに想い起こすだろう。彼の魂には憧れが、あるいは郷愁が生じる。自分を育んでくれた二つの世界、蒼穹のエーテルと母なる大地、その中間にいて、双方へ憧れつつ惹かれる。彼の生涯の哀しい漂蕩は、その予感の宿ったこの時にもう始まっている。彼にとって、美とは故郷の風物の、あるいは爽やかな、あるいはものの寂びたきらめきであり、心を痛くして駆け抜け

る映像である。芸術的な創造者だけが、しばらくの時間、その美の姿を現世の形に変えて確保する。地上にいて幸福になるには、彼は芸術家になるしかない。芸術家とは、太初への郷愁を最も烈しく味わい、そのために涕泣する、勇者である。

*

万象は律動リトムを持ち、律動によって巨大な生命の流れのなかに編み込まれている。私たちのささやかな生は、大地の律動に従属し、日々にちじちの昼と夜と、悲しく・心重く・楽しく・力漲る四季の感情に支配され、私たちの大地は、根源である宇宙の静けさの胸に不安な全存在を委ねて、ふしぎな寂滅を待つ。星々の運行は巡る環をつくる。しかし私たちの生命はただ涯しなく流れる。一つの年や生涯の季節は見分まなざけられても、生そのものと、それを盛る器である宇宙の極みは測り切れない。太初へ向ける私たちの眼射まなざしは、いつも惘然もうぜんと幽かすみ、そこから吹き訪れる風は、私たちの瞑想を茫漠の四辺へ空しく溶かし散らす。

おお、あらゆる思念を光被する永遠の意識！ しかしその意識はまた私たちの内部にある。永遠の生命は私たちの裡に宿り、一つの生に、一つの象徴の言葉を発せしめる。その言葉は輝かしく、跳躍する存在のはかない営みから逃れ出て、永遠の生命の自由な流れへ純粹に復帰する。放恣な、とりとめない生の流れから脱けだして、星々の調いあるへめぐりにあえて自己を差し加える。

おお、芸術よ！ 音楽よ！ おんみこそ、このような跳躍を私たちの魂に与えてくれる第一のエネルギーである。花咲く天使よ、その抱擁により魂ソウルに神々の生命を与える愛こひよ！ 私たちの酔える眼に、星の燃焼を咲きこぼれた花々の輝きと映らせる魔術師よ！ さまざまな形により、私たちの魂の混沌カオスから美の秩序へ、私たちの独自の意志を実現することは、この地上でいかに欲ばしい営みであることか。